

## 『時の守り人』

高橋 龍史

東京の下町、路地を曲がったところにある『時の音』という古時計店は、百年以上の歴史を持つ老舗だった。店主の高橋時計師（たかはしときし）は七十二歳、白髪交じりの髪に丸眼鏡をかけた温和な老人で、祖父の代から続く店を守り続けた。

店内には様々な時計が並んでいた。古いゼンマイ式の置時計、精密な機械式懐中時計、ヨーロッパから取り寄せたアンティークの柱時計。それらは皆、規則正しく時を刻み、心地よい音色を奏でていた。

「時計には魂がある」と時計師はよく言っていた。

「長く使われた時計は、持ち主の思いを吸収して、特別な存在になるんだ」

しかし、デジタル時代の到来と共に、店を訪れる客は年々減っていった。修理を依頼する常連客がわずかにいるだけで、新しい時計を買う人はほとんどいなかった。時計師の娘・和子（かずこ）は、父に店を閉めることを何度も提案したが、時計師は頑なに拒んでいた。

「時計は時間を教えてくれるだけじゃない。人生の大切な瞬間を記録する証人なんだ」と彼は言った。

「この店には、まだ使命がある」

ある雨の日の午後、店のドアが開き、ずぶ濡れになった三十代ほどの男性が入ってきた。

「すみません、傘を忘れてしまつて」と男性は言った。

「少し雨宿りさせていただけますか？」

「どうぞ、どうぞ」と時計師は微笑んだ。

「お茶でもいかがですか？」

男性は感謝して茶を受け取り、店内の時計を興味深そうに見回した。

「素晴らしいコレクションですね」と彼は言った。

「私は佐藤と申します。実は時計について少し詳しいんです」

二人は時計について語り合った。佐藤は時計の歴史や機械式時計の魅力について驚くほど知識があり、時計師は久しぶりに心から楽しい時間を過ごした。

雨が上がる頃、佐藤は立ち上がり、「また来ます」と約束して店を後にした。

その日から、佐藤は週に一度、必ず店を訪れるようになった。彼は時計師から修理の技術を学び、時には客の応対も手伝った。不思議なことに、佐藤が来るようになってから、店を訪れる客が少しずつ増え始めた。

ある日、佐藤は古い革のケースを持って店にやってきた。

「高橋さん、この時計を見ていただけますか？」

ケースの中には、銀製の懐中時計が入っていた。表面には複雑な模様が彫られ、裏側には『時は人を待たず、しかし人は時を動かす』という言葉が刻まれていた。時計師はルーペを取り出し、時計を詳しく調べた。

「これは珍しい品だ。十九世紀のスイス製だが、この機構は…見たことがない」

「祖父の形見なんです」と佐藤は言った。

「最近動かなくなっちゃって」

時計師は修理を引き受けた。しかし、分解してみると、内部の機構は通常の時計とは全く異なっていた。歯車の配置が複雑で、見たこともない部品がいくつも組み込まれていた。

一週間かけて修理を終えた時計師は、佐藤に連絡した。

「修理できたよ。不思議な時計だったが、今はちゃんと動いている」

佐藤が店に来ると、時計師は修理した懐中時計を手渡した。

「ただ、一つ変わったことがある。この時計、逆回りに動くんだ」

確かに、秒針は反時計回りに動いていた。佐藤は驚いたように見えたが、すぐに微笑んだ。

「祖父も言っていました。この時計は特別だよ」

その夜、時計師は奇妙な夢を見た。夢の中で彼は若返り、まだ見習いだった頃の自分になっていた。祖父が時計の修理を教えている場面や、初めて一人で修理を完成させた時の喜びを、まるで昨日のことのように鮮明に体験した。

目覚めると、体が軽く感じられた。鏡を見ると、白髪が少し黒くなっているように見えた。「年寄りの気のせいだろう」と時計師は思った。

しかし、それは気のせいではなかった。日に日に、時計師の体は若返っていった。白髪は黒くなり、シワは薄くなり、視力も回復していった。娘の和子は父の変化に気づき、心配した。

「お父さん、どうしたの？何か薬でも飲んでるの？」

「いや、特に何も」と時計師は答えた。しかし、彼は懐中時計との関連を疑い始めていた。

ある日、佐藤が再び店を訪れた。時計師は彼に直接尋ねた。

「あの懐中時計には、何か特別な力があるのか？」

佐藤はしばらく黙っていたが、やがて深く息を吐いた。

「実は、高橋さん。私はあなたに会うために来たんです」

「どういう意味だ？」

「私は未来から来ました。2075年からです」

時計師は笑おうとしたが、佐藤の真剣な表情に言葉を失った。

「あの懐中時計は、時間を操作する装置なんです」と佐藤は説明した。

「未来では『時の道具』と呼ばれています。使う人の時間を逆行させることができるんです」

「なぜそんなものを私に？」

「歴史の記録によると、高橋時計師は2025年、つまり今年、革新的な時計を発明することになっています。その時計が、後の時間技術の基礎になるんです。しかし、最近の歴史調査で、あなたはその発明の前に店を閉めてしまうことがわかりました」  
時計師は混乱した。

「私が革新的な時計を？そんなことできるはずがない」

「できます」と佐藤は力強く言った。

「あなたの技術と知識があれば。私たちは歴史を正しい軌道に戻すために、あなたに若返りの機会を与えたいんです」

時計師は窓の外を見た。雨が降り始めていた。

「信じがたい話だが、最近の体の変化を考えると…」

「時間はあまりありません」と佐藤は言った。

「懐中時計の効果は一時的なものです。あなたには、運命の時計を作る使命があるんです」

その日から、時計師は新しい時計の設計に没頭した。佐藤から未来の技術についてのヒントを得ながら、彼は日夜作業を続けた。

彼が目指したのは、単なる時間を表示する装置ではなく、『時間の質』を測定する時計だった。人々が充実した時間を過ごしているか、無駄に時間を浪費しているかを感じ、視覚化する装置。

「時間は有限だ」と時計師は言った。

「だからこそ、一瞬一瞬を大切にすべきなんだ」

三ヶ月後、時計師は最初のプロトタイプを完成させた。それは従来の時計の形をしていたが、文字盤には特殊な結晶が埋め込まれており、持ち主の時間の使い方に応じて色が変わった。充実した時間を過ごしていれば青く輝き、無駄な時間を過ごしていれば赤く警告した。

「これは素晴らしい」と佐藤は感嘆した。

「まさに歴史に記録されていた『時質計』<sup>じしつけい</sup>です」  
時計師は微笑んだ。

「時間の質を意識することで、人々はより豊かな人生を送れるはずだ」

彼らは時質計の特許申請し、小規模な生産を始めた。最初は懐疑的だった人々も、

使ってみるとその価値に気づき、徐々に評判が広がっていった。

しかし、時計師の若返りの効果は薄れ始めていた。白髪が再び増え、体力も落ち始めた。佐藤も、自分の滞在時間が限られていることを告げた。

「もうすぐ未来に戻らなければなりません」と彼は言った。

「しかし、あなたの発明は確実に歴史に刻まれました。未来は安全です」

佐藤が去る前日、時計師は彼に小さな箱を渡した。

「これは君への贈り物だ」

箱の中には、時計師が特別に作った時質計が入っていた。通常のものより小さく、ペンダントとして身につけられるようになっていた。

「これは…」佐藤は感動して言葉を失った。

「未来に持ち帰りなさい」と時計師は言った。

「そして、いつか私の子孫に会うことがあれば、この時計を見せてあげてほしい」

佐藤は頷いた。「実は、もう会っています」彼は静かに言った。

「私の祖母は、あなたの娘・和子の孫娘なんです」

時計師は驚いた。

「つまり、君は…」

「はい、あなたの子孫です。4代目になります」

二人は抱き合った。時を超えた血のつながりを感じながら。

翌日、佐藤は懐中時計を手に、時計師に別れを告げた。

「歴史は正しい軌道に戻りました。あなたの発明は、未来の多くの人々の人生を豊かにします」

「君に会えて良かった」と時計師は言った。

「未来に希望があると知り、安心した」

佐藤が懐中時計を開くと、まばゆい光が店内を満たした。そして彼の姿は、光の中に溶けるように消えていった。

時計師は一人残され、静かに時を刻む時計たちに囲まれていた。彼は自分の作った時質計を見つめ、微笑んだ。

『時は人を待たず、しかし人は時を動かす』

その言葉の真の意味を、彼は今、理解していた。

時計師の発明した時質計は、予想以上の成功を収めた。人々は時間の質に目覚め、より意識的に日々を過ごすようになった。

和子は父の事業を継ぎ、『時の音』は単なる時計店から、『時間の質』を研究する研究所へと発展していった。

時計師自身は、九十歳で静かに息を引き取った。臨終つしじょうの際、彼は不思議な微笑みを浮かべていたという。おそらく彼は、未来の自分の子孫たちが、彼の遺志を継いで時

間技術を発展させていく姿を、心の目で見ていたのだろう。

2076年、若き研究者の佐藤は、研究所の地下室で偶然、古い懐中時計を見つけた。それは彼が過去に持っていた時計と同じものだった。彼はそれを手に取り、静かに微笑んだ。

時間は円環えんかんのように繋がつながっている。過去と未来は、私たちが思うよりもずっと近いところにあるのかもしれない。

時計は今も、人々の胸元や手首で、静かに時を刻んでいる。青く輝く時、それは私たちに問いかける。

『あなたは今、充実した時間を過ごしていますか？』

時は誰にでも平等に与えられる。しかし、その使い方は人それぞれ。時の守り人たちは、今日も私たちに時間の大切さを教えてくれている